

白山麓の植物

～山地帯編～



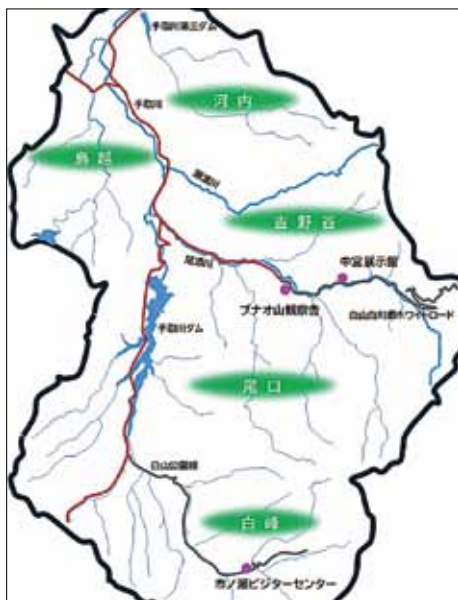
2026年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

白山麓の標高約 400m から 1,500m までの山地帯の植物は多雪な環境で生まれ、様々な動物たちの命を支えています。また、かつては食料生産のための焼畑や製炭業を行うために山の中で生活していた人々がいて、植物は山の中の暮らしで大切に利用されてきました。昭和 30 年代の燃料革命以降は、山で生活することは少なくなりましたが、山は県内外から訪れる人々が自然と触れ合う場となっています。

本誌では、高山帯と比較してアクセスが容易な白山市旧五村（河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村）の山地帯で広く見られるシダ植物・草花・木本について、雪国ならではの特徴や人の生活の中でどのように利用されていたかを紹介します。本誌を読んで植物に興味湧いてきたら、まずは身近なところから植物の観察を始めてみてはいかがでしょうか。



白山麓の旧五村の位置

表紙：サワアザミ

裏表紙：カタクリ

もくじ

1. 白山麓の植物が育つ環境	2
2. 雪と植物	3
3. ブナ林の植物	4
4. 水辺の植物	8
5. 林縁部の植物	10
6. 動物たちと植物のかかわり	12
7. 人の暮らしを支える植物	14
8. 植物に触れてみよう	17
9. 植物観察に出かけよう	19



1. 白山麓の植物が育つ環境

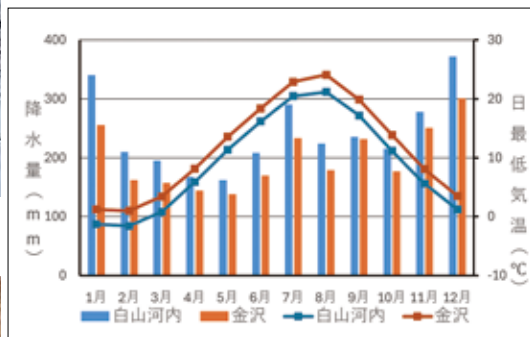
白山麓の気温は、年間を通して平野部の金沢と比較して低く、1月や2月には0℃を下回るほど冬の寒さが厳しい地域です。気候は、多雨多湿を特徴とする北陸型気候で、特に冬季は日本海側から吹く季節風が大量の積雪をもたらします。そのため、白山麓は国内屈指の豪雪地帯となっており、積雪量は金沢と比較しても多くなっています。例年の積雪量は、河内や鳥越周辺では、1～2m程度、さらに山奥の白峰や尾口周辺では3～5m程度となり、雪解けが遅く冬が長いといった特色があります。

斜面に生える樹木は、雪の圧力を毎年受けるため、根元が曲がっていたり、ヤマモミジのように樹形が傾いたりしている樹木が多く生育しています。

白山麓の冬はこれほど長く厳しいものですが、植物は長い年月をかけて世代交代を繰り返し、雪国の環境に適応した姿形となっていきました。



冬季のブナオ山観察舎周辺の斜面のヤマモミジ



白山河内と金沢の降水量と日最低気温の平年値

※気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php>)
の平年値 (1991-2020年の30年間の観測地の平均)
をもとに作成。



根元が曲がったブナ

2. 雪と植物

白山麓の山地帯の植物は多雪な環境の中で生育しています。オクノカンスゲ等、冬も地上の葉が枯れない草は0℃程度に保温される雪の下で凍らずに、春を待ちます。樹木も、ヒメアオキやハイイヌガヤ、エゾユズリハ等は背丈が低い樹形になっているため、雪圧に耐えて冬を越すことができます。これらの植物は、雪の少ない地域に生育するアオキやイヌガヤ、ユズリハが雪国の環境に適応した姿となった種類です。

また、春先の雪解け水が開花や展葉の季節に地上を潤すため、冬は葉を落とす落葉樹でも、オオバクロモジ等、葉が大型化する植物も見られます。

ヒメアオキやハイイヌガヤ、エゾユズリハ、オオバクロモジ等は、雪の多い日本海側に生育することから、「日本海要素」と呼ばれています。

ブナも日本海側の多雪地帯に生育するものは、雪に強く、生育が旺盛で葉が大きいといった特色があります。



春先のオクノカンスゲ



背丈が低いエゾユズリハ



オオバクロモジ
(白山市木滑産)

クロモジ
(山梨県産)

オオバクロモジは葉が大きい



雪解け水がブナ林を潤す

3. ブナ林の植物

ブナ・ミズナラ林

白山麓には、人間が生活する以前は広い範囲にブナ林があったのではないかと考えられています。白山麓で標高約1,000m以下のブナ林はかつて、焼畑や炭焼きに利用されてきました。焼畑耕作では、森林を伐採し、火入れをして焼き払い、数年間ヒエ・アワ・ダイズ・アズキ・ソバなどの作付を行い、その後放置された後に新しい林ができていきます。このような林は二次林と呼ばれ、ブナやミズナラの優先する林になっていきました。また、焼畑の跡地には、スギが植林され人工林となった場所もあります。そのため、丸石谷の国有林野等に残された原生林以外は、人が手を入れた林となっています。樹木の伐採を行った場所では、カタクリやキクザキイチゲ等の春を彩る植物やオオバクロモジ等明るい環境を好む植物が多く生育しています。このような植物は、自然条件下では雪崩で樹木が育たない場所や台風等で樹木が倒れて開けた場所に生育しています。



ブナ・ミズナラ林



オンソリ山のカタクリ

ブナ・ミズナラ林で見られる植物



イワウチワ (トクワカソウ) イワウメ科
地方名：ヒカリバ、ピッカリッコ (白峰)
開花期：4～5月頃

痩せた尾根筋の登山道等に生える。ここで作物を育てようとしてもうまく育たず、白峰では「ぴかりっこ畑に粟3升撒いて2升とれた」と言われていた。オンソリ山や中宮展示館の展望広場等でみることができる。



ニリンソウ キンボウゲ科
地方名：フクベラ (白峰)
開花期：4～5月頃

湿り気のある林縁部や土手に群生する。ほとんどの株が、茎葉から長い花茎を2本出すことが名前の由来。若芽をお浸しとして食べることができるが、毒草のトリカブトと葉の形が似ているため、要注意。



カタクリ ユリ科
地方名：カタコ (中宮)
開花期：4月頃

樹木が葉を広げる前の春の明るい時期に地上部が現れ、花を咲かせる。鱗茎に毎年デンプンを溜めて徐々に成長し、本葉が2枚になると花を咲かせる。種子にはエライオソーム*がついており、アリに遠くまで運ばれる。この鱗茎がかつては煮て食べられ、デンプンはキゴと呼ばれた。



オオバクロモジ クスノキ科
地方名：クロモジ、クロモヂャ (白峰)
開花期：4～5月頃

登山道沿いなど、どこにでも普通に生える。材が丈夫なため、かんじきの輪として利用された。樹皮によい香りのする成分が含まれているため、現代でも、和菓子の爪楊枝やアロマオイル、お茶等に利用されている。

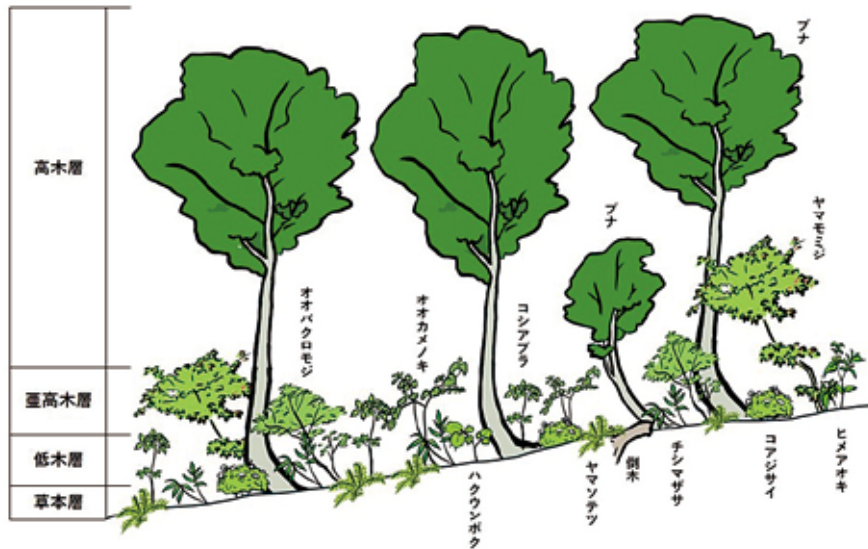
*エライオソーム：アリが好む物質でできた付属物。巣まで運んだ後、種は巢の外へ捨てられる。

伐採されなかったブナ林

標高約 1,000m 以下のブナ林のほとんどは焼畑や炭焼等に利用され、何らかの形で人の手が入った林となっていますが、集落の背後には、太いブナの木が残っている林があります。白山麓に暮らしていた人々は、ブナ林には、山崩れやなだれ、洪水等を防ぐ機能があることを知っており、集落を守るため背後のブナは伐採せずに残していました。このようなブナ林はなだれ防止林と呼ばれ、今でも尾添・荒谷・瀬波・仏師ヶ野・鶺鴒ヶ谷・白峰等に残されており、歩くことができる場所もあります。下の図は、白峰の林西寺の裏から登ることができる、おまい山の道沿いで見られるブナ林の階層構造です。ブナは、成長すると枝葉が上空からの日光を遮り、林内はやや暗い環境となります。そのため、亜高木層には、ヤマモミジやハウチワカエデ、若いブナ等のやや暗い環境でも、徐々に育って大きくなる樹木が見られます。このような林では、ブナが木陰をつくるため、涼しく快適に過ごすことができます。林床には、ヤマソテツや、チシマザサの他、オオカメノキやヒメアオキ等様々な低木が生えています。次のページでは、なだれ防止林で見られる植物を紹介します。



おまい山の林内の様子



白峰おまい山のブナ林の階層構造

なだれ防止林で見られる植物



ヤマソテツ オシダ科
地方名：不明

冬になると枯れる、夏緑性のシダ。ブナ林に多い。くると巻かれた春の葉がユーモラス。ジュウモンジシダも同所に生えることがあるが、ジュウモンジシダのように葉は枝分かれしていない。



コアジサイ アジサイ科
地方名：不明
開花期：6～7月頃

薄暗い林に生育する。エゾアジサイやタマアジサイのような大きな装飾花は持たないが、アジサイの仲間。秋になると薄い黄色に紅葉する。



オオカメノキ ガマズミ科
地方名：キツネノシリボシ (白峰)、クサギ (桑島)
開花期：4～6月頃

花序の周りには、装飾花と呼ばれ、花粉を運ぶ昆虫を誘引する機能を持つと言われており、おしべやめしべはない。葉が秋の落葉の頃は臭い匂いを放つため、桑島では「クサギ」という呼び名もある。幹は粘り強く折れにくいので、大玄能（金槌のようなもの）の柄に利用された。



ハウチワカエデ ムクロジ科
地方名：マンゲツ (白峰)
開花期：4～5月頃



カエデの仲間、葉柄が短い点の特徴。葉は7～11裂する。白峰では、カエデの仲間は樹皮を剥ぎ、ヘジナと呼ばれる籠等をつくる材料として利用されていた。

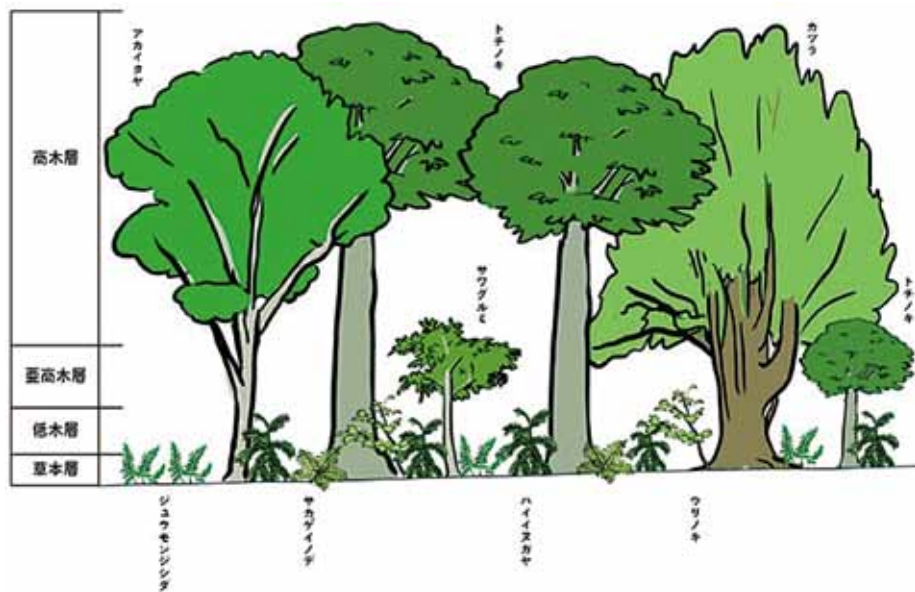
4. 水辺の植物

いはいりん 溪畔林

山地の溪流周辺の斜面は、山腹の崩壊が頻繁に起こる環境で、水辺に生育する樹木が生育しています。このような溪畔林に生育する樹木としては、サワグルミやトチノキ、ケヤキ、オニグルミ、カツラなどがあります。その中でも、トチノキやオニグルミの果実は、古くから食用に用いられ、人の生活をささえてきました。低木層には、ハイヌガヤやヒメアオキ等の常緑樹、草本層には、ニシノホンモンジスゲやアキギリ等の日本海要素が林床に多いという特徴があります。下の図は、別山市ノ瀬道で見られる、溪畔林の階層構造です。こちらの登山道では、巨大なトチノキやカツラをみることができます。カツラの木は、秋になって黄色く色づく、葉から甘い香りが漂います。



別山市ノ瀬道の溪畔林



別山市ノ瀬道の溪畔林の階層構造

溪畔林で見られる植物



ジュウモンジシダ オシダ科

地方名：ヘンメノジョウリ（白峰、桑島）

溪畔林など、湿った場所に多く生える常緑のシダ。ヤマソテツとは違い、十字に枝分かれする葉が特徴。地方名を漢字で書くと、蛇草履。乾燥させて冬の尻干ヒラヒラ※に利用した。

※尻干：トイレトペーパーとして、お尻を拭くのに利用された。



ウリノキ ミズキ科

地方名：キササゲ（桑島）

開花期：6月頃

湿った林内に生える低木。地方名は果実の形がキササゲ（豆）に似ていることによる。



トチノキ ムクロジ科

地方名：トチ（白峰）

開花期：5～6月頃



成長の早い高木。果実は食用になるため、かつては飢饉きんに備えて貯蔵されていた。現代でも、とちもちの材料として利用されている。白峰には、幹周約13mの「太田の大トチ」があり、国の天然記念物に指定されている。



オニグルミ クルミ科

地方名：クルビ（白峰）

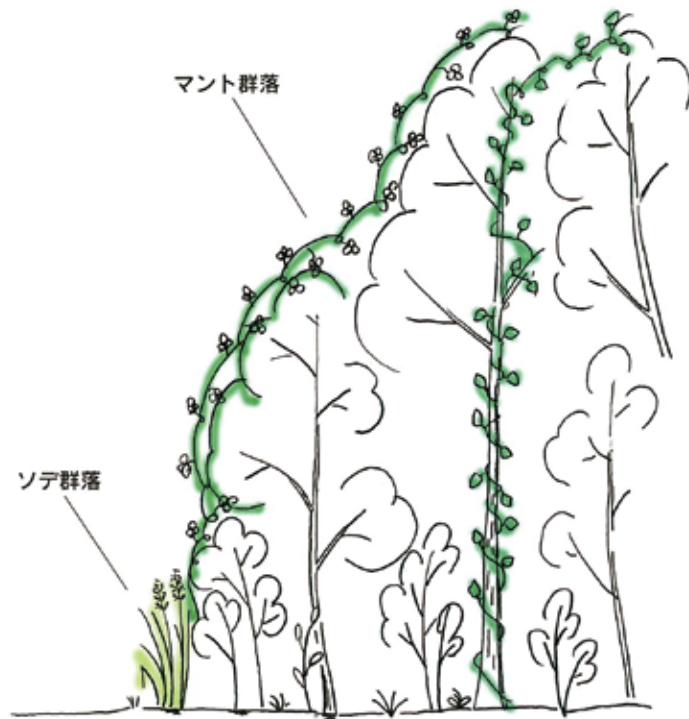
開花期：4～5月頃

果実は、「ゼンマイのクルミ和え」や菓子の原料として利用されてきた。材は軽く丈夫で草刈り鎌や鉞ななの柄などにした。葉を潰した汁や果実の外皮を鍋で煮詰めた液は、谷川に流して岩魚を捕った。

5. 林縁部の植物

乾燥や急な温度変化から森を守る林縁部の植物

森の中に入る前に、森を外から見ると、森の周りには様々な草本や低木が生えていることに気が付きます。これらの植物の群落は、森の中に風が入り急激に温度や湿度が変化するのを防ぐ役割があり、寒い風が衣服のソデやスソから入るのを防ぐ役割と似ているため、ソデ群落と呼ばれています。また、さまざまなつる植物は光を求めて樹木の高いところへ登り、森林を覆っています。森を覆うつる植物も直射日光による乾燥や大雨による林内からの土砂流出を防ぎ、森を護る役割を持っています。これらの植物の群落はマントが雨風から身を護るのに例えて、マント群落と呼ばれています。次のページでは、このような林縁部で森の中を乾燥や急激な温度変化や激しい雨による土の流出から護る役割をしている植物を紹介します。



マント群落とソデ群落

※白山自然ガイドマニュアル（石川県白山自然保護センター）より引用

林縁部の植物



ノリウツギ アジサイ科

地方名：ネリカワ（白峰）（桑島）

開花期：7～8月頃

白い花卉のように見えるものは、萼片^{がくへん}で、花粉を運ぶ昆虫を誘引する働きがあるのではないかとされている。樹皮は昭和20年代まで紙すきの原料として採取販売されていた。材は固く摩滅^{まいつ}しにくい^{ため}、石臼の心棒や木釘にされた。



キブシ キブシ科

地方名：ツキツキ（白峰）

開花期：3～4月頃

春先にかんざしのような、花が咲き、マルハナバチの仲間が訪れる。材の中心がスポンジ状になっており、子供は芯を棒で突きだして遊んでいた。果実にはタンニンが多く含まれているため、草木染にするとよく染まる。



マタタビ マタタビ科

地方名：コツラ（河内、鳥越、白峰、桑島）

開花期：6～7月頃

普段、葉は緑色をしているが、初夏、花が咲くころに葉が白くなる。その年に生えた枝を採取してコツラ細工に用い、ザルやカゴを作っていた。果実は黄色く完熟する前のものが、マタタビ酒に利用された。



クズ マメ科

地方名：クズフジ、ウマノマメ（尾口）

開花期：7～9月頃

日当たりのよい場所に生える。根からデンプンをとった他、短く切って葉子の代用にもされた。若茎も食用とされた。花には甘い香りがある。茎は綱の代用に用いられた。

6. 動物たちと植物のかかわり

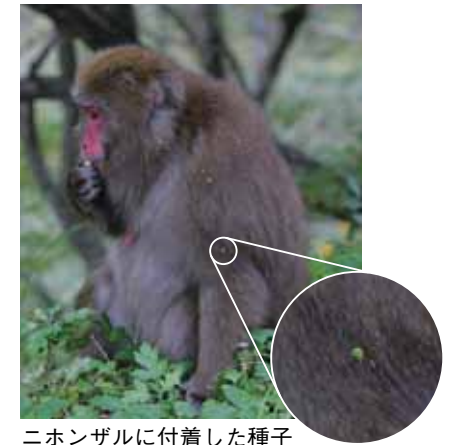
植物は、四季を通して大小様々な動物の食物となっています。例えば、春先には雪崩で背の高い樹木が育たない急斜面の草原へ、ツキノワグマやニホンザル、ニホンカモシカ等の大型哺乳類がアザミ類やシャク等を食べてやってきます。また、秋に実るブナやミズナラ、ミズキやキハダ等は冬の前の動物たちの大切な食物です。

食物となること以外でも、植物は花にやってくる小さな昆虫を捕らえるアオジョウカイ等の昆虫に採餌場として利用されたり、葉がオトシブミなどの昆虫の巣の材料として利用されたりもしています。一方で、動物たちは、植物の子孫繁栄に貢献しています。例えば、昆虫は花粉を食べる代わりに花粉を他の花へ運び、哺乳類は果実を食べ、種子をフンとして排出したり、体にひっついたりして植物の種子を遠くまで運びます。



ひっつき虫

動物に種子を遠くまで運んでもらう植物の中でも、動物の毛に付着することで遠くまで運ばれる植物の種は「ひっつき虫」と呼ばれています。ひっつき虫には、粘着性の物質で動物の体に付着するタイプや毛がかぎ爪のようになっているタイプなどがあります。秋に森を歩くと足元に付着していることが多いので、コレクションして遊んでみても面白いかもしれません。



ニホンザルに付着した種子



7. 人の暮らしを支える植物

白山麓の豊かな山菜

白峰では、昭和30年代に入り様々な野菜が食べられるようになる以前は、長い冬に備えて山菜を乾燥して貯蔵していました。山菜は飢饉のときにも多くの種類の植物が食べられており、都会のような悲惨さはなかったと言われています。白峰村には、飢饉に備え、山菜を平素から準備しておくことや、乱獲しないようにといった御触れがありました。この他、河内村では、ゼンマイの出る山はゼンマイ山と呼ばれ、資源が枯渇しないように管理されていました。しかし、第二次世界大戦後になって自由解放されたところ、たくさん採取されるようになり、太く良いものは細くなり、収穫量も少なくなってしまったそうです。



ゼンマイ



クサンテツ (通称: コゴミ)
地方名: クグミ (白峰)、カクマ (河内)



ヤマノイモ
地方名: ヤマイモ (白峰、桑島、河内)



サワアザミ
地方名: オオアザミ (白峰)、タニアザミ (桑島)

暮らしの道具としての植物

白山麓では、かつては焼畑や炭焼きをして人が生活していたことを紹介しました。まだ綿や化学繊維がなかった時代は、衣服は身の回りの植物から採った繊維を利用し、生活に使う様々な道具も樹木や草を利用して作成されていました。当時の人々にとってさまざまな植物は生活と深く結びついており、多くの植物に呼び名がついていることから、現代よりも植物に対する関心が高かったことが想像されます。次のページには、暮らしで利用されてきた植物を紹介します。



材料: タノウツギ



材料: スギ

材料: ミズキ

ユデマタ

山菜や大根の葉などを大量に茹でる際に利用した。

ジャジャナシ

糸を枠に巻いて束ねるのに利用された。



材料: チガヤ

材料: ウリハダカエデ



材料: オオバクロモジ

ヒデリバト

夏場の作業着として利用された。

カンジキ

冬季に雪の上を歩くために利用された。

道具として利用された植物



タニウツギ スイカズラ科

地方名：ダニメノキ、ババコラシ（白峰）

ダニバナ（吉野谷）

開花期：5～7月

葉ダニが付くと言われている。春にマルハナバチの仲間が花の蜜を吸いに来る。枝が対になって出のを利用してユデマタの材料にもなった。



ミズキ ミズキ科

地方名：アオミズキ、クルマミズキ（白峰）

開花期：5～6月

花には、様々な昆虫が訪れる。9月頃に実る果実はクマが好み、熊棚（クマが枝を折り、おしりの下に敷いていくとできる、鳥の巣のように見えるもの）ができる。ニホンザルや鳥等も果実を食べる。枝の形を利用してジャジャナシ等の道具がつけられた。



ウリハダカエデ ムクロジ科

地方名：ウリナ（白峰、桑島）、ウンナ（中宮）

開花期：5月

樹皮の繊維が通直で水はけがよく、ゴミが付きにくいので、樹皮を剥いでヒデリバトなどの作業着を作った。樹皮は箆等を編むのにも利用されたが、ヤマモミジやイタヤカエデには劣った。秋に実る翼のような果実は2個が対になっており、一つ外して放り投げるとぐるぐる回る。



アカソ イラクサ科

地方名：オウロ（白峰、桑島）、

オロ（河内、吉野谷）

開花期：4～5月

繊維をとって、布を織った。河内村では、綱や舟の帆としても利用された。救荒植物*として、葉も食べられた。夏に刈り、影干して細かく碎き、磨臼で挽いた粉を湯にといて食べた。

*救荒植物：飢饉の際に食べることができて、飢えを凌ぐに足る野生植物

8. 植物に触れてみよう

植物の名前を覚えるには、見た目だけではなく、手触りや匂いもヒントになります。触れるとかぶれる植物もありますが、以下に触れたり、匂いを嗅いだりして楽しむことができる植物を紹介します。

触れて楽しむことのできる植物



ツリフネソウ ツリフネソウ科

地方名：ミズブクラ（白峰）

開花期：7～9月



湿ったところに生え、白峰では、オタカラコウ、シラネセンキュウとともに、ワサビ沢（ワサビを育てている沢）の3大雑草といわれていた。

遊び方：緑色のよく膨らんだ果実を探してみよう。触れてみると面白いことが起こる。



ハクウンボク エゴノキ科

地方名：ヒトツバ（白峰）

開花期：5～6月

葉をみると、オトシブミようらんの揺籃（卵を一つ産み付け、葉を巻いたもの）や、ハマキガの幼虫がつくった、ロールクッキーのような形の巣がついていることがある。

遊び方：葉には柔らかい毛がたくさん生えている。葉を触ってみよう。



ササユリ ユリ科

地方名：ユリ（鳥越、白峰）

開花期：6～7月

草刈りをした場所など、明るい環境に生える。吉野谷村や鳥越村の村の花に指定されていた。かつては盗掘等により、個体数が少なくなっていた時期もあった。

遊び方：花には香りがある。どのような匂いがするか、嗅いでみよう。



オトコエシ オミナエシ科
 地方名：オオズチ（白峰）
 開花期：8～10月頃

日当たりの良い場所に生えるオミナエシの仲間。若葉がお浸しにされ、食べられた。

遊び方：花をよく見ると、さまざまな昆虫がやってくる。良い香りがするだろうか。匂いを嗅いでみよう。



サンショウ ミカン科
 地方名：サイショ（白峰、桑島）
 開花期：5～7月頃

葉や果実を薬味として利用するため、家の周辺で栽培されていた。

遊び方：葉をこすって匂いを嗅いでみよう。枝にとげのあるものもあるので、気をつけよう。



ミズナラ ブナ科
 地方名：ナラ（白峰、桑島）
 開花期：5～6月頃

秋に実るどんぐりは、ツキノワグマなどの野生動物が食べる。樹皮は白っぽく、めくれやすい。

遊び方：写真のように、どんぐりの帽子を両手で持ち、V字をつくる。写真の赤丸の箇所に息を吹き込む。うまくいくとホイッスルのような音が出る。



ササ類 イネ科

オクヤマザサ、チシマザサ等、様々な種があるが、種の見分けは難しいため、ここではササ類とした。オクヤマザサの葉はササ寿司に利用されてきた。

遊び方：新芽を引き抜いて、一度広げると、再び丸まる。その状態で葉の付け根側を吹くとブーと音が出る。

9. 植物観察に出かけよう

白山麓の森には、面白い植物が沢山あります。しかし、森には触れるとかぶれる植物や、蜂、マダニなどがいます。また、誰もが気持ちよく森で過ごすには、ゴミを必ず持ち帰り、携帯トイレを持参するといった配慮も必要です。下の欄と次のページには、森に入るときの約束や持ち物を書きました。紙地図は読図に慣れていないと難しいので、最初は慣れた人と歩くと安心です。また、近年はスマートフォンのYAMAPやヤマレコなどの地図アプリも普及しています。電波が通じない場所もあるので、出かける前に、インターネットがつながる環境で地図をダウンロードしておきましょう。スマートフォンは緊急時にも利用することがあるので、カメラは別途持参する、予備バッテリーは持参するなど注意が必要です。準備ができれば、森へ出かけてみましょう。

・帽子：熱中症やケガ防止。

・リュックサック
 : 両手が使えるように。

・長袖・長ズボン
 : マダニ対策やケガ防止。
 黒っぽい服は蜂に刺されやすいため、なるべく避ける。ポリエステルなど、化学繊維が汗で冷えにくい。

・スニーカーなど歩きやすい靴
 : 靴底がすべりにくいもの。長距離歩くこともあるので、履きならしておく。長靴でも良い。



森に入るときの服装と持ち物



森に入るとき約束

① 他人の所有地や植物採取禁止の場所で植物を採取しないこと

山には、必ず持ち主がいます。勝手に植物は採集しないようにしましょう。
また、国立公園内や県立自然公園内では植物の採取や損傷は禁止されている場合があります。

② むやみに動植物を傷つけないこと

どのような植物や小さな昆虫でも生態系を支える一員であることを忘れないでください。写真を撮ろうとして足元の花を踏まないように気を付けましょう。

③ 日の出前や夕方以降の山歩きは控えること

道迷いやツキノワグマ等の野生動物と遭遇してしまう恐れがあります。余裕をもって計画しましょう。

④ ゴミは必ず持ち帰ること

食品の放置は、野生動物が寄り付く原因になってしまったり、野生動物に悪影響を与えたりする場合があります。もちろん、トイレに捨てるのもNGです。
どのようなゴミでも必ず持ち帰りましょう。

植物の観察が楽しめる施設

市ノ瀬ビジターセンターや中宮展示館周辺には、散策路があります。季節を変えて、訪れてみてはいかがでしょうか。開館情報や生き物の観察情報についてはX(旧Twitter)やInstagramをご確認ください。



市ノ瀬ビジター



中宮展示館

以下のQRコードをご利用ください。



X(旧Twitter)



Instagram

おわりに

白山地域には、1300種類以上の植物があると言われており、本誌で紹介できたのはごく一部です。白山麓には、他にもさまざまな植物が生育しています。植物のことを深く知るためには、実際に見てみることや触れてみることも大切です。はじめて森に入る方は、市ノ瀬ビジターや中宮展示館でガイドを行っているボランティアの方と歩くと安心です。また、白山自然保護センターでも年間を通してさまざまなイベントを行っています。

本誌を通して、白山麓の植物に親しみをもつことや、植物が生態系で果たす役割や人とのかかわりに対する理解を深めるきっかけになれば幸いです。最後に本誌を作成するにあたり、下記の文献を引用・参考にしました。各文献の編集に関わられた方々にはお礼申し上げます。また、植物の利用用途について情報の提供をいただいた山口一男様、民俗資料の写真撮影をさせていただいた白山ろく民族資料館の方にも合わせてお礼申し上げます。

引用・参考文献

石川県白山自然保護センター編 2000年「白山自然ガイドマニュアル」
石川県白山自然保護センター・吉野谷村中宮編 1981年「白山の自然誌2 プナ林の自然」
宮脇 昭編著 1989年「日本植生誌 中部」
尾口村教育委員会編 2005年「心のふるさと尾口」
尾口村史編纂専門委員会編 1978年「石川県尾口村史 第一巻・資料編一」
尾口村史編纂専門委員会編 1981年「石川県尾口村史 第三巻・通史編」
白峰村史編纂委員会編 1962年「白峰村史 上巻」
白峰村史編纂委員会編 1991年「白峰村史 第三巻」
特定非営利活動法人 白山麓地域文化振興協議会発行 2012年「白峰の花」
鳥越村史編纂専門委員会編 2006年「続鳥越村史『図説編』」
上山秀之著 1983年「河内村史 下巻(民俗編)」
吉野谷村村史編纂専門委員会編 2003年「吉野谷村史 通史編」
「吉野谷村小百科事典」1990年 編集委員会編「吉野谷村小百科事典」

発行日 令和8年3月31日
文・構成 岩本 華奈
挿 絵 内藤 恭子
編集・発行 石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑4
Tel. 076-255-5321 Fax. 076-255-5323
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html>
E-mail : hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印 刷 株式会社 中川印刷

白山の自然誌 46

白山麓の植物

～山地帯編～